

梶井基次郎「瀬山の話」考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1991-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飛高, 隆夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1504

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



梶井基次郎「瀬山の話」考

飛 高 隆 夫

一

梶井基次郎の習作（私は未完の作品と呼びたいのだが）「瀬山の話」は、彼の処女作「檸檬」が、その中の一挿話を独立させることによって成立したということ、知られている。また、梶井が、その「檸檬」について、「あまり魂が入つてゐないもの」（近藤直人宛書簡、大13・11・12）と語っていることもよく知られている。このことについては、「多くの小説的可能性を捨てた後に、「檸檬」という小結晶を得たことに対する愛惜の情と言えるだろう。」（濱川勝彦^{（注）}）、「結局、この「瀬山の話」の「檸檬挿話」が作品として完全に独立し成熟したところに「檸檬」という作品が生まれ出たといえるだろう。しかしまた、別の視点に立って見れば、作品「檸檬」成立に関して、「雪の日」草稿↓「瀬山の話」で試みられた数多くの可能性が捨てられたことは確かな事実である。なるほど、これら草稿の各部分から後の作品が多く生まれ出たのではあるが、それはあくまで部分的な再生であって、大きな小説的構想やそれに伴う意欲的な方法は生かされなかった。「檸檬」が、このような大きな犠牲の上に成り立ったことを忘れてはならない。」（同）という指摘がある。私が濱川氏の所論を引用したのは、そこに、従来の「瀬山の話」と作品「檸檬」との関係についての所論が集約されて表現されている、と思うからである。しかし、そこでも、指摘されている、「瀬山の話」で「試みられ」て捨てられた「数多くの可

能性」、つまり、「大きな小説的構想やそれに伴う意欲的な方法」とはどういうものであったのか、ということにまったく触れられていない、という不満が残るのである。これは、この点について、従来の所論が、ほとんど触れていないことにもよるのであるが——。この小論では、「瀬山の話」を一箇の未完の作品として検討し、そこで「試みられ」た「数多くの可能性」を少しでも明きらかにしてみたいと思うのである。

二

梶井基次郎の親友の一人、中谷孝雄が、梶井の第二作「城のある町にて」について、語っている文章がある。(注と)それには「檸檬」の成立状況についての示唆も含まれているので、引用してみたい。

『青空』の出発に当り、あるひは梶井はこの作品（「城のある町にて」——飛高注）から始めたいと思ったこととも推察される。ところがそれに着手しようとする、やはりその前にあった長い憂鬱時代が反省されてくる。そして洗ひざらひ京都時代の憂鬱、倦怠、放埒を書き切らうとして『瀬山の話』に取りかかった。しかしそれは締切か何かの都合で完成せず、やむをえずそのなかの一挿話を独立させて発表したのが『檸檬』であった。

中谷孝雄は、見るとおり、「瀬山の話」が完成しえなかつたのは、「締切か何かの都合で」と語っている。しかし、この間の事情は、そのように単純なものであったろうか。

ここで改めて問題になるのは、「瀬山の話」とは、本来、どのような作品であるはずであったのか、ということである。

先に触れたように、「瀬山の話」は「檸檬」への一過程の作品としてとらえられている。その過程を見てゆくと、まず、「秘やかな楽しみ」という詩作品がある。

一顆の檸檬レモンを買ひ来て、

そを玩ぶ男あり、

電車の中にはマントの上に

道行く時は手拭の間に、

そを見 そを嗅げば、

嬉しさに充つ、

悲しくも友に離りて

ひとり 唯独り 我が立つは丸善の洋書棚の前

セザンヌはなく、レンブラントはもち去られ、

マチス 心をよろこばさず、

独り 唯ひとり、心に浮かぶ楽しみ、

秘やかにレモンを採り、

色のよき 本を積み重ね、

その上にレモンをのせて見る、

ひとり唯ひとり数歩へだたり

それを眺む、美しきかな、

丸善のほこりの中に、一顆のレモン澄みわたる

ほくえまひて またそれをとる、冷さは熱ある手に快く、

その匂ひはやめる胸にしみ入る、

奇しきことぞ 丸善の棚に澄むはレモン

梶井基次郎「瀬山の話」考

企らみてその前を去り

ほほえみて（うぶ） それを見ず、

この詩については、「檸檬」の「本質的なモチーフがほとんどすべて」刻まれている（三好行雄）という見方が一方にあり、それに対して、「不吉な塊」「見すばらしくて美しいもの」明暗の対照、錯覚、「諧謔心」という重要なモチーフが欠落」していて、「この詩の延長線上に作品「檸檬」を考えることはできない」（濱川勝彦）という批判がある。この濱川氏の批判については、「秘やかな楽しみ」が抒情詩であることを考慮に入れれば、あらずもがなの批判ということになるが、とりあえずは、それ以上、触れないことにする。

このレモン体験が散文化されたのは、日記草稿の第三帖においてである。淀野隆三氏は、「『檸檬』を挿話とする断片」と命名しており、濱川氏はそれをしりぞけて「雪の日」草稿と命名している。淀野氏の命名は、あくまで「檸檬」への方向で梶井の習作群を見ようという姿勢によるものである。それに対して、濱川氏は、雪の日の彷徨の中にそのことが想起されることを重視しているであろうが、その時に想起された二つの挿話——レモン挿話と深夜の彷徨の挿話とが「瀬山の話」にそのまま組み込まれていることを考慮すれば、そこに「瀬山」の名前はないとしても、「瀬山の話」への方向を見る方が適切であろうと私は思うのである。

その読み方はいづれにせよ、「秘やかな楽しみ」から日記草稿第三帖の草稿、そして、「瀬山の話」へという一本の線があることに間違いはない。

しかし、このラインだけでは、「檸檬」への方向は説明できても「瀬山の話」の誕生は説明できない。日記草稿第三帖に、ある雪の日の彷徨の中で二つの挿話を想起したという作品を構想した時、梶井が考えていたのは「檸檬」への方向ではなく、のちに、「瀬山の話」と題されることになる作品についてであったことに違いはない。そして、第三帖の草稿が「瀬山の話」になるためには、さらにいくつかの要素が必要であったことは、両者を比較して見れば、容易に見出だし得

ることであろう。

三

「瀬山の話」は、語り手の「私」が瀬山の性格について語り、瀬山が語る挿話を「一人称のナレイション」で紹介する、という形をとっている。瀬山という一人の人間を、客観的に、重層的にとらえようという方法がとられてをり、日記草稿第三帖の、語り手である「私」の独白で終始する形から一つの進展を見せている、ということがいえる。

そして、作品の構成を見ると、「私」による瀬山の性格の分析・「檸檬」の挿話・「感覚器の惑乱」をめぐる数々の挿話・深夜の彷徨の記述、そして瀬山の手紙の抄録という形になっているのであるが、最後の、手紙の抄録は実現されていない（このことについては、後で触れる）。

ここで、右の各章の内容を紹介しながら、「瀬山の話」の内部に立ち入ってみたい。

まず、「私」による瀬山の紹介である。瀬山は、いま、「私の視野」の中にいない。その瀬山を、なぜ「私」は語ろうとするのか。「私はその男のことを思ふといつも何ともいひ様のない気持になつてしまふ」のである。そして、その気持をつきつめてゆくと、「私は一体何時彼が正真正銘の本気であるのか全く茫然としてしまふ」のである。それは、「恐らく彼自身にもわからないだらうと思ふ。然し一体どんな人間がその正真正銘の本気を持つているだらうか——いや私はこんなことを云ひ度いではなかつた。然し私は、恐らくはどんな人間もそれを持つ「つ」ていないといふことを彼をつくづく眺めているうちに知る様になつたのだ」というのである。「人間」は誰も、「正真正銘の本気」を持つて生きてはいない。これが「私」が瀬山の生き方を見ての結論である。いいかえれば、梶井が、自分の生き方を省りみての結論である。「正真正銘の本気」を持つて生きることのできない「人間」は、どのように生きてゆくのか。結局、それぞれの性格に従つて生きてゆくより外はない。生きてゆく、ということ自体が、「正真正銘の本気」によるものでなく、かりそめの、そ

の時その時の気分によるものにしか過ぎないのである。と、したら、問題は、それぞれの人間が、どのような性格を与えられているか、ということになる。瀬山はどういう性格なのか。

瀬山の「だらしなさ程度抜けのものはまたない」であり、「全く瀬山は夢想家と云はうか何と云はうか、彼の自分を責める時程ひねくれて酷なことはなく」、「彼は片方の極端にあって、その片方の極端でなければそれに代へるのを肯じない」、しかも、「彼は常に何か昂奮することを愛した」のであり、「彼にとつては生活が何時も魅力を持つてゐなければ、陶酔を意味してゐなければならなかつた」のである。そして、瀬山の性格の根底にあるのは、「澄み度い気持」と「濁り度い気持」との共存である。

この、清と濁とに引き裂かれた性格について、梶井は悲劇の名を与えるのである。「性格」という、宿命的・運命的なものによる悲劇——。「……やがては希臘悲劇のような、予定された破滅が自分を待つてゐる」と、梶井は同時期の習作「犬を売る露店」で述べている。「瀬山の話」は、まず、一人の人間に宿命づけられた悲劇として構想されているのである。瀬山は、とりあえず、破滅すべき運命のもとにあるのである（とりあえず、といった意味については、のちに触れる）。

このように「瀬山の話」を見てくると、ここで想起されるのは習作「裸像を盗む男」の主人公「足越」である。今、この名前を何と読んだらよいのか、つまり、瀬山がセザンヌなら足越は何の、あるいは誰の寓意なのか不明だが、足越が瀬山の原型であることは確かである。

「裸像を盗む男」は、語り手である「私」が、二条寺町のかぎや（喫茶店）で「学校でよく見る、悪魔めいた顔をしてゐる男」をめぐる二、三人の話の中から「足越が酒精中毒で岩倉の癡狂院へ入つた」という「シヨツキングな話」を聞き、時々、自分を「天才だと名乗り」、またある人々に「一種の天才」と呼ばれ、「とにかく人々の中で一種特殊な位置を占め」、「私も一種得体の知れない尊敬を強ひられてゐた」足越の行状を想起し、彼に、「精神上の畸型児である二重人格

者を連想したりした」ことを思い出す。そして、その夜、「足越は室長の純潔や清濁あわせ吞むおだやかな所に安住してゐる様に見え、室長は足越の性格に対して特殊な理解を持つてゐるらしく、足越のすることをある意味では崇高化して、悪い方面は意に介してゐない様に思はれた。却つてこの方面では足越を庇護する様な所があつた」という、「私」も信頼する室長が、足越をその日見舞つて来たといひ、その室長から、「足越の直話であるといふ狂氣の真相」を聞くことになるのである。そして、「断つておくがこの話の説話法はこれから室長の一人称と、足越の一人称と、この私の一人称とを、元來話もと話ばなしのうまくない自分には随分混雜されると思はれるが、読者はよく注意して読んで頂きたい」という断り書きをはさんで、足越の「直話」がはじまるのである。しかし、足越の「直話」は、「僕は自分が狂人になつたとは信じない。正当なところこれはかなりひどい神經衰弱なんだらうと思つてゐる。しかし僕は今ここへ入つてゐるのが好都合な理由がある。(後略)」、「随分しかし奇妙な所だ。(後略)」という、二つの簡単なメッセージを伝えるだけで、「……(欠)」となつてゐる。そして、全集によると、「自分達は耐えられなくなると窓から外へ小便をした。小便は白い湯氣を立て、暗い土の上へ落ちた。ステイムと興奮にじつとほてつた顔に冷たい夜氣が心よく感ぜられた。南舎の上みなべに、冷たい、天狼星の光が座まつてゐた」(傍点付加)と結ばれるのである。

この作品は、一体、何を意図して試みられたのであろうか。方法の点から見ると、「私」と室長と足越との、三人の一人称を重ねることによつて、足越の人物像を、客観的に、重層的に表現しようとして試みてゐる点で、「瀬山の話」に大きく接近していることが見てとれる。また、「悪魔めいた顔をしてゐる男」はメフィストフェレスを連想させ、その点出は、ゲーテの「ファウスト」を梶井が意識していることを知らせる。梶井の日記草稿第三帖の濱川氏がいうところの「雪の日」草稿のあとに習作「卑怯者」のヴァリアントがあり、その次に、「嘗ては博士ファウストがこの巖頭に立つて。／＼一体此の世界を一つに統べてゐる者は何であらう。其処に働いてゐる一切の力の源は何であらう。と悲痛な独白をしたのだ。／＼凡そ人間の一切の努力もこの河岸から彼岸へ渡るためには甲斐のないものなのだらうか……(缺)」という断片(?)があ

る。「断片(?)」と記したのは、あるいはこれが「卑怯者」草稿の末尾かもしれないとも思うからである。それは、いずれにしても、梶井の意識の中に、前出のギリシア悲劇とともに、ファウスト博士の悲劇もあつたことは確かである。梶井は、「此の世界を一つに統べてゐる者」を思い、「彼岸へ渡るため」の人間の努力に思いをいたし、人間の努力の無力さを嘆いているのである。「裸像を盗む男」という作品の意図は明きらかではない。しかし、梶井が、あくまで、人間という存在の根本に迫ろうとしていることは見てとれるのである。

四

次に、瀬山の語る挿話を見てゆくことにする。挿話の第一は、「檸檬」と題されている。「檸檬」挿話は、周知の通り、「恐ろしいことには私の心のなかの得体の知れない嫌厭(悪) といはうか、焦燥といはうか、不吉な塊が——重くしく私を圧してゐて、私にはもうどんな美しい音楽も 美しい詩の一節も辛抱出来ない」その頃、「街から街へ彷徨を続けてゐた」「私」が、ある果物店の店頭で檸檬を見つけて、その一顆を求め、その重さに、「私が常々尋ねあぐんでゐたもの」、「すべての善いもの美しいものとせず(づ) けられたものを重量に換算して来た重さ」を感じるところからはじまる。そして、以前は足繁く足踏みしたが、その頃はまるつきり遠ざかつていた丸善に自然に足が向いていた。しかし、丸善へ入ると「変な憂鬱が段々とたてこめて来」、画集を次ぎから次ぎへと抜き出しては積みあげた果てに、「袂の中の檸檬」を思い出し、「私」は画集をさまざまに積みあげ、築き直して、「奇怪な幻想的な城廓」を築きあげ、その城壁の頂きに檸檬をぶえつける。次に、その檸檬を「黄金色に輝く爆弾」と見立てる「奇妙なアイデ(イ)ヤ」を思いつき、自分に丸善の書棚を爆破に来た「奇怪な悪漢」という役割をふりあて、「後をも見ずに丸善を飛出した」というのである。

この挿話は、次のようにしめくくられている。

何に？ 君は面白くもないと云ふのか。はゝゝゝ、そうだよ、あんまり面白いことでもなかつたのだ。然しあの時、秘密な歓喜に充「た」されて街を彷徨（たづな）いてゐた私に、

——君、面白くもないぢやないか——

と不意に云つた人があつたとし玉へ。私は慌てゝ抗弁したに違ひない。

——君、馬鹿を云つて呉れては困る。——俺が書いた狂人芝居（傍点付加）を俺が演じてゐるのだ、然し正直なところあれ程馬鹿気た気持に全然なるには俺はまだ正氣過ぎるのだ。

この結末の部分が、作品「檸檬」においては削除されていることも、よく知られている。この問題については、あとで触れることにしたい。

次の挿話は、「感覚器の惑乱」をめぐつてのものである。従来、「瀬山の話」は「私」による瀬山の性格の分析と「檸檬」挿話とをひとまとめにし、「感覚器の惑乱」と「深夜の彷徨」と私の名づける部分とはひとまとめにされる、という、三好行雄氏によれば、「レモンのエピソードと夜のエピソード」という「瀬山の話」の理解の仕方が通用しているが、それに対しては、私は、十分に納得しがたいものを感じる。「感覚器の惑乱」の挿話は、日記草稿第三帖の、濱川氏がいうところの、「雪の日」草稿には、見当たらないものであり、「瀬山の話」においては、形式上、「深夜の彷徨」の途中で想起される形になっているが、私はこれを一つの独立とした章に近いものと見たいのである。

「感覚器の惑乱」は、「聴覚」及び「視覚」の二つの感覚器において現われるのである。そのうち、「聴覚」に関するものは、「悲しい遊戯」「睡眠遊戯」と認識されている。大まかにいえば、「夜の響き」——「とほい響きは集つてぼやけて、一種の響き」を作り、「そしてその間に近い葉触（はふ）れの音や、時計の秒を刻む音、汽車の遠い響（き）や汽笛も聞える。私の遊戯といふのはそれから一つの大聖歌隊を作つたり、大管弦（絃）楽団を作ることだつた」というのである。

「聴覚」の惑乱による遊戯が、主として瀬山の誘導によるものであるとすれば、「視覚」の惑乱は、外部から幻想が訪れる、という形を取っている。「京阪電車にのつてゐて、私の座つてゐる向側の、しめ切つた鎧戸を通して、外の景色が見えて来」る、「セザンヌの兩集の中で見る、絵画商人か何かのタンギイ氏の肖像」が、「画の中から立ち上つて笑ひ出す」。これらは、「(幻想が向ふから迫つてくるときは/もう人間の壊れるときだ)」という、宮沢賢治の「小岩井農場」パート九の一節を想起させる。そのような自分を、瀬山は、「あの頃の私というのは此頃考へて見ると神経衰弱だつたらしい。身体も随分弱つてゐた」というのである。そして、この「神経衰弱」ということばから、大正一三年七月十一日付忽那吉之助宛書簡の中の、「精力、精力、願くば神経衰弱と精力と共存せよ。自分は迷信的に神経衰弱に非ざればある種の美が把めないと思つてゐる。然しそれを成長させ弾き落してくれるのは精力だと思つてゐる。/ともかくも今は精力がほしい。空想が続かないのが情けない。」という一節に連想が走る。「感覚器の惑乱」の章は、たしかに「深夜の彷徨」の中で想起されるという形で語られているが、これは、梶井にとつて「神経衰弱と精力」との「共存」の確認だったのでないか。

そして、「神経衰弱」についてはもう一つ、大正一二年一月二八日付宇賀康宛の書簡に次の一節がある。

此の頃はあのいやな寂しさから逃げ去ることが出来たといふ気がする。考へて見るとあの寂しさはあんな生活のつきもので深入りすればする程その色が濃くなつてゆくものだ。またあれには酒精中毒といふ多少気狂染みたアブノルマルな状態がつけ加はる。丁度石鹼玉が色を変へる様に、急に落胆したり急に超人になつた様な精神の高揚を感じたり、新聞記事で泣いたり、そんなことが三十分程の間に随分行はれる。意志が極端に働かなくなる。だからどこどこへ行かうか行かうまいかという様なことでも馬鹿馬鹿しい程迷ふ、

といい、「或は神経衰弱の一種かも知れない」とまとめている。「あのいやな寂しさ」の時代が、「瀬山の話」の背後にあることは、この「感覚器の惑乱」の章の中に、「情緒が空の雲の様にカメレオンの顔の様に姿をかへ色を変へるのもそ

の時だ」という文章があることによつても納得できるであらう。

さて、第三の挿話は、「深夜の彷徨」の記述である。

「友人等の下宿を転々して」いるうちに、次第に「気兼ねが昂じて来る」と、自分が卑屈になってゆくことが堪らなくなり、「一そさつぱり自分の下宿へ飯つて見やう」と、その夜「私」は、渋りがちな足をはげましながら、自分の下宿へと向つていたのである。

丁度木に実つた林檎の一つで私はあつた。虫が私を蝕むでゆくので他の林檎の様に真紅な実りを待つ望みはなくなつてしまつた。早晚私は腐つておちなければならぬ。然しおちるにはまだ腐りがまわつていない、それまで私は段々苦しみを酷くうけながら待たなければならぬ。然し私は正気でそれを被けるには余りに弱い。とうとうお終ひに私は腐らず力の方に加名(盟)する、それと同時に自分自身を麻痺さなければならぬ。借金がかさんで直接に債務(権)者が母を仰天さすまで、また試験が済んで確実に試験がうけられなくなつたことを得心するまで——私は自分の感情に放火をして、自分の乗つてゐる自暴自棄の馬車の先曳きを勤め、一直線に破滅の中へ突進してそして椎(摧)けて見やう。始まれるものならそこから始めやう。——其頃私はそういふ風な狂暴時代にいたのだ。

長い引用となつたが、これが、「瀬山の話」のもう一つの背景である。

さて、「私はあれやこれやと思ひながら白川道をとぼとぼ下宿の方へ歩いてゐた」。

私は病み且つ疲れてゐた。汚れと悔いに充されたこの私は地の上に、あらゆる荘嚴と豪華は天上に、——私はそんなことを思ふともなく思ひながら、真暗な路の上から、天上の載(載)冠式とも見える星の大群飛を眺めた。

「深夜の彷徨」の章は、このあとに、「私はその時程はつきり自分が独りだといふ感じに捕へられたことはない。(中略)何と云つたらいいか、つまり状(条)件的ではない絶対的な寂寥、孤独感にとらえられたこと、その孤独感の中で、母を思い出したこと、そして「若し母が今、此の姿の私を見つけたならば、息子の種々な悪業など忘れて、直ぐ孩児

だつた時の様子を抱きとつて呉れるとはつきり感じた」こと、「私は何だか母が可哀そうに思つてくれるよりもこの私自身がもう自分といふ者が可哀そうで堪らなくなつて来た」という自己愛憐の思い、その果ての自我分裂（「そして深い夜の中で私は二人になつた」）、「心が二人に分れてゐたことの微かな後味」、その時起こつた「悲しき遊戯の衝動」——自分の名前「瀬山」を様々な呼び方で呼んでみたこと、その中で、「先程の第一の私と第二の私はまた私の中で分裂した」と「など、さまざまなが書かれてゐる。中でも、自己愛憐に続く自我分裂の体験、そして、その「微かな後味」は、あとあとの梶井文学を考える上で重要な問題を含んでいる。しかし、私は、この「深夜の彷徨」でつぎつぎに語られる出来事が、「汚れと悔いに充されたこの私は地の上に、あらゆる莊嚴と豪華は天上に」という対比からはじまつてゐることに注目したい。あるいは、私は、この対比にこそ、「瀬山の話」の主眼があつたのではないか、とも思うのである。

私が瀬山の原型と見る足越を主人公にした「裸像を盗む男」は、傍点を付加しておいたように、天狼星の光を点出することで結ばれてゐる。いや、それよりも、梶井のもっとも早い習作の一つ、「小さき良心」に、「俺はあるいてゐる、燦爛とした星の下を。昂奮と怖れと苦悶に庄せられながら。ひつそりとした暗い町を今人間の形をした苦悶が火熱（照）つて行き過ぎるのではないか」という一節があるのである。梶井の習作群のほとんど初めのものと、ほとんど最後のものにこの類似の表現があることは、軽々に見過ごしてよいものではない、と思う。

私は、先に、「瀬山の話」を「真正正銘の本気」で生きることができず、それぞれの性格に従つて生きるより外はない人間の悲劇、というように考へた。人間というものがそもそもそのような存在なのであり、瀬山は、その一つの典型なのである。そして、その瀬山が「真正正銘の本気」の姿を見せたのが、この「深夜の彷徨」の章なのであり、そのもつとも具体的なあらわれが、天上と地上の自分との対比なのであり、その直後に実感した、「絶対的な寂寥、孤独感」^{ソリタリナ}なのである、と私は思う。梶井はここに、人間の、ひいては自己の存在のありようを確認したのである。これに比べれば、「檸檬」は傍点を付加しておいたように、「狂人芝居」の自作自演であり、「感覺器の惑乱」も「消極的な享樂」に過ぎない

のである。作品「檸檬」を「あまり魂の入つてゐないもの」と自評した理由も、ここに見てよいものであろう。

五

さて、ここで、「瀬山の話」および「檸檬」に関するいくつかの問題に触れておきたい。その一つは、「瀬山の話」の未完成のことについてである。「瀬山の話」は、そこから「檸檬」挿話を独立させたままで、「感覚器の惑乱」の一部は「城のある町にて」において再生されているが、「感覚器の惑乱」および「深夜の彷徨」の章のほとんどは、そのまま放置されている。「檸檬」の挿話を独立させた時には、すでに、梶井は、「城のある町にて」のノートを作成しており、梶井が、「狂暴時代」と訣別して、「単純で、平明で、健康な世界」(「城のある町にて」に生きたいと願ったところに、放置された理由を見てよいであろう。ところで、今、いいたいのは、放置された理由ではなく、未完に終った理由である。

「瀬山の話」は、瀬山が落第して除籍され、「私」は東京へ出てしまい、瀬山の行方がわからなくなってしまいが、いろいろと手を尽くした結果、彼の手紙がやっと私の手許に届いたといい、その手紙の抄録で結ばれるはずであった。「私」が彼についてのことを書きかけたのはその手紙を受取つてからのやや軽い安緒(堵)の下にである」というので、瀬山が、ともあれ、少康状態にあることはわかる。しかし、その手紙の記述がいっさいないままで中絶しているのである。この手紙の内容を考えるには、「裸像を盗む男」の末尾が参考になるのであろうと思われる。「裸像を盗む男」は、前述のように、足越という「私自身も一種特殊な尊敬を強いられてゐた」男が、酒精中毒のため癡狂院へ入院し、室長がそれを見舞いに行き、足越の「直話」による「狂気の真相」を「私」が聞く、というところで結ばれている。その「直話」が中絶していることも前にみたとおりであるが、「裸像を盗む男」を読み進んで行き、この末尾にいたるとき、感じるのは、梶井の自己救済の強い意志である。足越を「酒精中毒」による発狂に追い込んだのは、梶井の自己の運命の先取りであ

り、そうすることによって、自己がその運命に陥るのを避けようとしている、ように思われるのである。「瀬山の話」にも、おそらく、同じような事情が働いていたと思われる。この、作品中における自己救済、つまりは、瀬山を救済しなければならぬ、という思いが、「瀬山の話」を未完成のままに終らせたのであろう、と私は考える。瀬山が、とりあえず、破滅すべき運命のもとにある、と記したのは、この、梶井の意志を忖度そんたくしてのことである。

次に「檸檬」挿話と、作品「檸檬」についてである。抒情詩「秘やかな楽しみ」が、濱川氏がいうところの「雪の日」草稿で、はじめて散文化されたことは、前に見たとおりである。しかし、ここでは、「レモン」はまだ爆弾には見なされておらず、画集の棚から「種々な色の表紙の本を手当り次第抜き出して色の配合を考へながら雑然と積み重ねた」その上に、レモンをのせ、「その黄金の固まりは雑多な色の諧調をひっそりとひとつひとつにまとめ」ており、「ほこりの多い騒然とした書店の中にそのレモンのあたりの空気のみは変に緊張してレモンはその中心に冴かに澄み渡つてゐる」のを見て、「これでよし」と思い。「そしてそのまま後を見ずに丸善を出た。そしてその日一日そのレモンがどうなつたことかと思ひ回らしては「楽し」微笑んでいた」というのである。これは、「秘やかな楽しみ」をそのまま散文化したものといつてよいであろう。しかし、注目すべきことは、この事件が、「何と悲しい遊戯だつたのだらう。私はその頃の私自身をいたはり度い様な気になりつつもその馬鹿氣た狂気をはかなく思つた」と、まとめられていることである。次の「瀬山の話」の「檸檬」の章では、レモンは爆弾と化し、主人公は「奇妙な悪漢」を称しているが、あくまで、「狂人芝居」の自作自演なのである。つまり、「雪の日」草稿においても、「瀬山の話」においても、「檸檬」挿話は、あくまでも、「悲しき遊戯」、「狂人芝居」という、消極的な価値しか与えられていないのである。それが、作品「檸檬」と「檸檬」挿話とを大きくへだてるものである。このへだたりを生んだものとしては、作品「檸檬」の脱稿が大正十三年十一月として、その年の八月に三重県松坂町（城のある町にて）の義兄宮田汎方に遊んだことの効果（前出）による、と見るより外はない。

いふならば、梶井は、心の展望というようなものを、求めて、得られないでいたのである。「裸像を盗む男」においても、また、「瀬山の話」においても、梶井は自己の救済に執心したが、それを得られないでいたのである。それが、なぜ、「檸檬」において達成されたのか。繰り返し語った、「城のある町にて」の背景となる体験が一つあったとして、それだけで片付けられる問題であるうか。「瀬山の話」の「檸檬」挿話の末尾に、「狂人芝居」云々の発言があり、それが作品「檸檬」においては切り捨てられたことについては、前に触れた。三好行雄氏は、「ここには過去を見る現在の眼と、瀬山を見る語り手の眼が同時に存在する。「檸檬」ではこの一節が消える。この一節の象徴する相対的認識が消えた、というべきかもしれない」といい、濱川勝彦氏は、おそらく三好氏の所論を踏まえながら、「作品「檸檬」で、これが削られたことは「瀬山の話」全体との関わりを打ちきり、レモン挿話が独立する際の、当然の処置と言えるが、また一方、そのような過剰な相対化を添加しなくとも「檸檬」自身、十分に相対化され、諧謔かぎまの精神で統一されているからでもある」と読んでいる。私は、濱川氏の読み方に組みするものであるが、濱川氏がその「諧謔の精神」の働きをいうだけで、その出所とでもいふべきものに触れてくれないところに、いささかの不満をもつのである。私は、その所を、先程、不器用にも、心の展望、というようない方であったのであるが、それをもう少し具体的にいえないだろうか、と考へる。作品「檸檬」にあって、「檸檬」挿話にないものは何であろうか。と考えると、作品「檸檬」の第三段落に思いつく。

時とき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのやうな市へ今自分が来てゐるのだ——という錯覚を起さうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂ひのいい蚊帳と糊のよききいた浴衣。其処で一月程何も思はず横になりたい。希はくは此処が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、

私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして、私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。(傍点付加)

長い引用になったが、ここには、まず、現実脱出の意向が語られており(レモンを爆弾と見立て、自分を「丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢」と見立てるのは、変身による現実脱出の願望であろう)、また、その手段として、「錯覚」の方法化が語られている。おそらく、このあたりの認識から、梶井の心の展望とでもいべきものは開かれていたのであり、濱川氏がいうところの「諧謔の精神」での統一ということも達成されていたのである。

注1 濱川勝彦編『鑑賞日本現代文学17 梶井基次郎・中島敦』(角川書店、昭57・1)

注2 中谷孝雄『梶井基次郎』(筑摩書房、昭36・6)

注3 三好行雄「青春の虚像 「檸檬」 梶井基次郎」(『作品論の試み』、至文堂、昭43・6)

※小論中の三氏の引用は、すべて、右の著述によった。